

私は日本の文化を愛する

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

私は冬になると北関東の平野を歩きたくなる。冷たい空っ風が運ぶ関東ロームの乾いた匂いが、私に冬を実感させてくれるからだ。

ドイツ人建築家のブルーノ・タウト氏が滞在した少林山達磨寺は、群馬県高崎市の碓氷川に面している。最寄り駅は信越線の群馬八幡だが、JR高崎駅から川沿いのサイクリングロードを歩いてゆくことにした。澄んだ青空の下で赤城山や榛名山などを見渡しながらの二時間は、私が抱く冬の情景を十分に満たしていた。

達磨寺の門前に着き、黄檗宗独特の中国風の山門をくぐると、長い石段が本堂まで続いていた。例年一月六、七日の七草大祭だるま市には、数十万人が訪れるらしいが、時期をはずせば静かなものだ。

タウト氏が暮らした洗心亭は、本堂よりも少し下った境内の東隅にあつた。六畳と四畳半二間の小さな木造建築だが、そこから見える広々とした平野と上州の名だたる山々が、タウト氏に慣れない暮らしへの不安を忘れさせた。

タウト氏は、昭和九年八月一日から約二年二カ月を洗心亭で過ごした。ナチスが台頭したドイツには、社会主義者の烙印を押された者の居場所はなく、「日本インターナショナル建築会」の招きに応じて

来日し、そのまま亡命した。高崎には実業家の井上房一郎氏に呼ばれ、工芸の指導をする傍ら、日本とその文化に関する多くの著述を行った。日本での建築活動は、自身が「建築家の休日」と自嘲するほど恵まれなかったが、タウト氏は洗心亭での生活をこよなく愛した。毎日付近を散策し、ある時は葉の上の露の玉を見つめ、ある時は氷の下を流れる水の音にじっと耳を傾け、「此処こそ私が去りがてに思つた最初の土地である」と日記に記した。

昭和十一年の十月にトルコのイスタンブール芸術院の招きに応じて洗心亭を去ると、わずか二年後に彼の地で急逝した。出来ることなら自分の骨は少林山に埋めてほしいと願っていたという。

生前のタウト氏と親交があつた建築史家の藤島亥治郎氏が、故人を偲ぶために一周忌の一月前に洗心亭を訪れたおり、若き工芸家の水原徳言氏と偶然に行き逢つた。高崎の工芸指導所でタウト氏の薫陶を受けた水原氏は、タウト氏を心から慕い、またタウト氏も芸術的教養と高潔な精神を備えたこの若者を愛していた。

洗心亭の傍らには、松や桜、楓などが植わっている。タウト氏は木々が織りなす四季折々の風景を次のように表現した。「夏には針葉の冠が隣り合わせ

た木々の軽い葉と雑り合い、冬には同じ木々の雪を被った裸の枝と一緒に、また秋には墓地に生えた二本の楓の華麗な真紅の紅葉と交り、そして春は櫻の樹が淡紅色の衣を纏った枝を展はして家の屋根にかぶさり、この世のものと思へぬ美景を見せた」。水原氏は、タウト氏が達磨寺の住職に送った色紙の文言を石碑に刻み、この林の近くに建てるつもりだと語った。その計画は実現され、かつて日本の文化を愛した建築家が、ここにいたことを今も伝えている。



洗心亭の傍らに立つブルーノ・タウトの碑

[交通] 信越線・群馬八幡駅から徒歩約20～30分
JR高崎駅から徒歩約1時間半～2時間

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。